

今月は、ある程度の収賄は文化的に容認されていた中国としては珍しく清廉潔白なお役人のお話です。

・>・>・>・>・>・

北宋に勤勉で学門の好きな富弼ふひつと言う人がおりました。彼は努力の結果朝廷の大臣になりました。

ある年、北方で契丹が兵を挙げ北宋に攻めかかって来て、朝廷に多くの領土を割譲するようにと要求しました。朝廷は直ちに富弼を契丹に派遣して、契丹人と談判させました。富弼は、契丹人を説得して、領土割譲の要求をあきらめさせ、北宋王朝の利益を守ることに成功しました。

何年か後には黄河が氾濫し、多くの農民の家屋や農地を押し流したので、帰るべき家を失った農民たちが徒党を組んで都へ押し寄せました。富弼は国中から食料を集めて、道中の至る所に給食所を設けて、粥を配り、農民が必要とする様々な物資を集めて自由に持って行けるようにして、農民の苦境を救う工夫をしました。後の世の人々は、「富弼は語り継がれるべき立派な、徳の高い大臣だ」と賞賛しました。

・>・>・>・>・>・

言葉の意味：徳＝品格と徳行；望＝声望、道徳心が高く、名望が高い。

使い方：張先生は徳高望重（行いが立派で声望がある）なので、誰もが先生を信頼している。

・>・>・>・>・>・

以前にもお話ししましたが、北京滞在中（もう15年以上前になりますが）、清朝・乾隆時代けんりゅう、最大の汚職大臣・和珅のお話をテレビで見ました。

お話は、和珅がどんなに巧妙に乾隆帝に取り入り、皇帝の寵愛を良いことに、権力を一身に集め

て汚職もやりたい放題にした様子を描いたものです。和珅の同僚の大臣で、穏やかで常識的な人がいました。一見、清廉潔白で汚職には縁がなさそうです。いつも穏やかで、意見を求められると、常識的な判断を示し、皆から信頼される老練な大臣でした。

お話の中で、この大臣は、官職を求めて相談に来る人々に決して約束はしません。勿論、賄賂のような金品は受け取りません。しかし官職に欠員が出た時は、人物の適性を見極めて任命するので、決して頼まれたからではないのですが、頼んだ方はその大臣のお陰と見え、お礼の金品を届けます。

ドラマでは、和珅と対比させて、自分の利益だけのために賄賂を取って権力を使う和珅に対して、自分の利益は考えず国のためだけに動いても、権力のある人のところにはお金が集まることを示しかったのでしょうか。

挿絵 満柏氏



昔の中国では、このようにお礼の金品を受け取ることは収賄の罪には問われなかったのでしょうか。

今の世の中は贈収賄を厳しく取り締まっていますが、なかなか根絶できません。人間の本性が、権力とお金を好む傾向にあるからでしょうね。しかもこの二つはお互いを助長する関係にあるようですから、そこに私利私欲が絡むと、「徳高望重」などという言葉はすっかり忘れられてしまいます。

「権力者がその力を自分の利益のために行使するのは、人間として恥ずかしいことだ」という認識をどうやったら持ってもらえるのでしょうか。刑罰を厳しくするだけでなく、こういう人達にこそ「道徳教育」を徹底すべきではないかとかんがえますが、如何？